

# 日本の繊維産業はこのまま衰退してしまうのか

## ～一宮市、岐阜市の繊維産業調査～

光武 グループ

### はじめに

日本の繊維産業は、今もって一大産業であるが、往時に比べ輸出が大きく減少し、また、輸入品に大きく押され、「斜陽産業」のイメージが定着している。しかし、輸入は頭打ち傾向を示しており、構造改革を推進すれば、国際競争力を持った産業に、再び飛躍する十分な可能性を有している。

日本の繊維産業の有する技術力、デザイン力等は世界有数であり、生産や流通のロスを大幅に削減しつつ、技術、デザイン等を活用したコストパフォーマンスの良い商品を開発・生産・販売する構造となれば、日本の繊維産業は国内外で十分な国際競争力を発揮し得る。先進国の中で日本ほど衣類の輸出の少ない国はなく、これは裏を返せば国際競争力さえ有すれば、大いなる可能性があることを意味している。

日本の繊維産業の一大集積地である尾州地域およびアパレル産業のまちとして戦後発展してきた岐阜市の調査を通して、日本の繊維産業の現状を把握し、さらに少しでも活力を取り戻すための方策について、若者の目を通して検討する。

### 調査概要

#### ①調査目的

近年、ファストファッションの流行により日本のアパレル産業は変化してきた。店頭に行き、タグを見ると海外製品ばかりが並ぶ。日本のアパレル産業は厳しい状況におかれた。

一方で、アパレルを支えている繊維産業はどうだろうか。海外に工場を置く起業が増加する中で古くから繊維産業の中心であった尾州地域は大きな影響を受けた。調査を進めていくと数多く繊維産業は衰退の経緯をたどっているという論文がでてきた。

その一方で繊維産業の潜在的可能性も出てきた。そこで繊維産業が本当に斜陽産業であるのかをヒアリング調査によって明らかにする。また、調査によって浮き彫りになった今後の課題と改善点について述べる。

## ②調査地域および日時

本調査は愛知県一宮市、岐阜県岐阜市、羽島市にて、2012年10月24日～27日までの4日間実施した。

## ③調査対象企業（7社）

一宮市の調査対象（4社）

- ・株式会社ソトー・宮田毛織株式会社・中伝毛織株式会社・一宮地場産業ファッションデザインセンター

岐阜市・羽島市の調査対象3箇所

- ・岐阜婦人子供服工業組合・岐阜ファッション産業連合会・株式会社カワボウ

繊維産業は、表1に示すように、川の流れに例えて「川上・川中・川下」に分類されるなかで企業活動がなされているが、今回の調査対象企業はおもに川上、川中に属する企業である。

表1 アパレル業界の分布図-川上・川中・川下-

産業区分	企業のタイプ	産業内の位置づけ
アパレル 素材産業	繊維素材産業	川上
	テキスタイル産業	
アパレル 産業	アパレル縫製業	川中
	アパレル企業	
	アパレル卸売業	
アパレル小売産業	アパレル小売業	川下

## ④ 調査方法

企業を訪問して業務内容等について説明を聞き、質疑応答の後、工場見学を実施した。その後、再度質疑応答の時間が設定された。1社当たり2時間、最長で3時間であった。

## 調査企業の概要

一宮市の訪問企業 4 社について簡単に紹介をする。

### 1. 株式会社ソトー「川上・川中」

繊維産業の流れは、

原料→糸→織り・編み→染色加工→デザイン縫製→ファッション衣料 となるが、

株式会社ソトーは、染色加工を行う日本有数の企業である。

織機で織り上がったばかりの織物は、汚れなどが付着しそのままでは衣料素材に用いることはできない。染色加工とは、こうした汚れを落として、染色したり、織物の表面を整えたり、起毛させて表面感を出す技術である。

株式会社ソトーの「強み」は、調査から以下のようにまとめることができる。

1. 高品質を創り上げる先進の生産設備と独自のシステムを導入
  - ・最新設備で省力化、生産性・品質を向上
    - 省力化をすることにより、環境にも配慮し、地域に愛される工場づくりに取り組んでいる
  - ・再現性にこだわる、独自の染色システム
    - 染色機内部の温度を自動コントロールするシステムを導入し、産地により微妙性質が異なる羊毛等を均一に、イメージ通りに染色することが可能になり、色の再現性が向上した
2. ソトーの黒は、より黒く、シワにならない
3. 高品質保証を実現

### 2. 宮田毛織工業株式会社「川上、川中」

原糸から生地まで一貫生産を行い、テキスタイル本部との「生販一体」体制を確立している企業である。

社名は毛織であるが、ニットの企画製造販売を手がけるニットメーカーである。一般的に知られている、セーターのニットではなく、スーツ等に用いるためのニットを編む技術を備えている企業である。

従来、ニットはスーツに利用されることは少なかったが、最近はニットの良さを活かしてブレザーなどにも使われるようになった、ロンドンオリンピックの日本人選手団のスーツ地に宮田毛織のニット生地が使われている。

### 3. 中伝毛織株式会社「川上・川中」

中伝毛織株式会社が立地している尾州地区は、木曾三川の豊富で良質の水を背景に発達した、ウールの一大産地である。

中伝毛織は、主に毛織物・化合繊維物・ニット服地を製造、販売するテキスタイルメーカーであり、多様な販売チャンネルに対応する企画力を持ち、生産力は業界トップクラスを誇っている企業である。

特にレディース向けテキスタイルにおいては、永年トップシェアを守り続けている。中国に3社の合弁梳毛紡績工場を持ち、国内外に紡績・糸染・織布・染色整理機能を持つテキスタイルメーカーで、安定した素材の確保を可能としている。

### 4. 一宮ファッションデザインセンター

第三セクター方式で運営されている、尾州地域の繊維産業の要となるセンターであり、繊維産業の情報収集や提供を行っている。

愛知県尾張繊維技術センターに隣接して昭和59年に設立され、ファッション・マーケティングに関わる情報収集・提供を始め、新商品開発、需要開拓、人材育成などの業界振興事業を行っている。

## 調査内容の分析

ヒアリングと工場見学を通して、繊維産業についての強みと弱みを分類する。

#### <強み>

- ・世界から日本の技術力は高い評価を得ている。
- ・日本のモノは良いという信頼性がある。
- ・衣料以外への進出（飛行機、防弾チョッキなど）が進められている。
- ・先進国での高いファッション性のニーズ、新興国での需要拡大など、海外市場の可能性が広がっている。
- ・繊維産業の分業のいいところはベストをチョイスできる、それによってリスクが分散される。
- ・ほかの産地で取り組んでいることは尾州でもできるが、尾州で取り組んでいることは、他の産地にはできない。
- ・ロスのない作り方、売り方をすればこんない産業はない。
- ・人は衣類を必ず必要とするため、繊維産業はまだまだ未来がある。

### <弱み>

- ・ 繊維産業は斜陽産業ではないか、というマイナスのイメージが強い。
- ・ 国際的な販売力の欠如、とくに最終製品としての国際販売力は非常に弱い。
- ・ 労働者の賃金上昇による高コスト化
- ・ 後継者不足
- ・ 人材や開発投資の繊維製造離れ
- ・ 国内人口減による市場の縮小、およびそれに対する方策が足りない
- ・ 繊維産業に携わる人の消極的意識
- ・ いいモノを作っているのに尾州産地が知られていない。

## 結 論

強みをさらに強くし、弱みを強みに変えていかなければならない。

1. 日本の繊維業界は前述したように衣料以外での進出を果たしている。しかし認知度が低い。そのすばらしい製品を売り出していくために、広く認知させることが第一に重要である。
2. 繊維産業に従事する方たちの意識向上を図らなければならない。

海外進出という挑戦に弱腰であり、国内ばかりに目を向け、なかなか踏み出せないでいる。先進国の中で日本ほど衣類の輸出の少ない国はなく、これは裏を返せば消極的な意識の下で仕事をしているということの意味している。

## 提 言

繊維業界全体の意識改革が必要である。

国内のみならず海外からも評価されている日本の製品、**Made in Japan** 製品に誇りと自信を持ってもらうことが必要。その意識の下、最終消費財としての衣料品を海外への輸出を増やすことが重要となってくる。

日本の位置付けは調査により日本の製品、日本の質が我々の認識よりも高かったことが判明した。

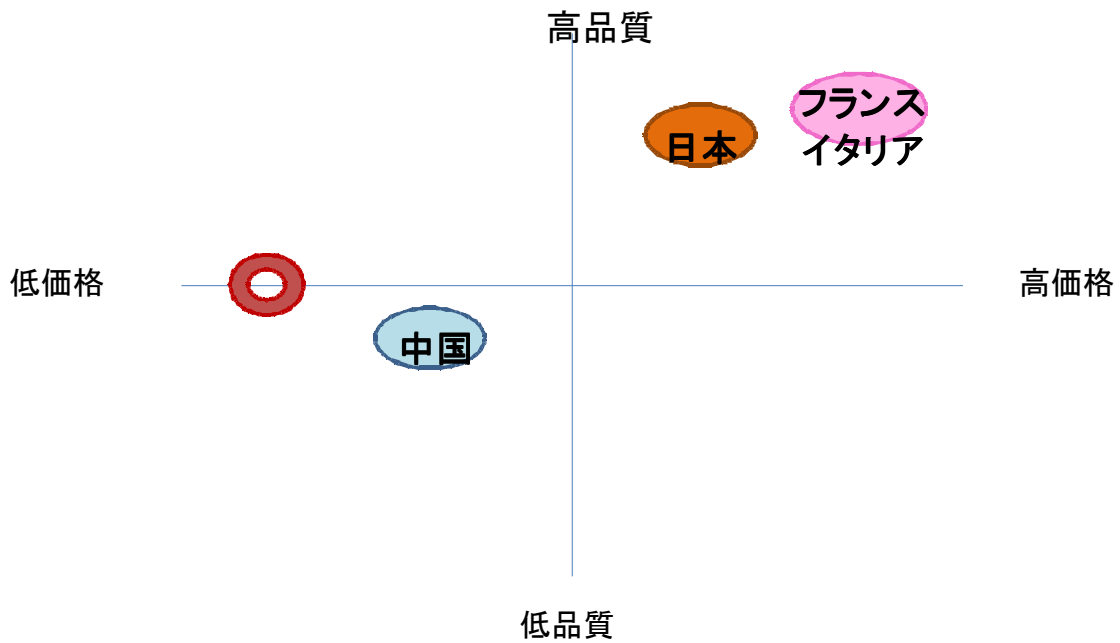


図1：従来の我々の認識

大雑把に見たときに中国製品は低価格、低品質、ドイツ、フランス、イタリアの製品は高価格、高品質といったイメージがある。

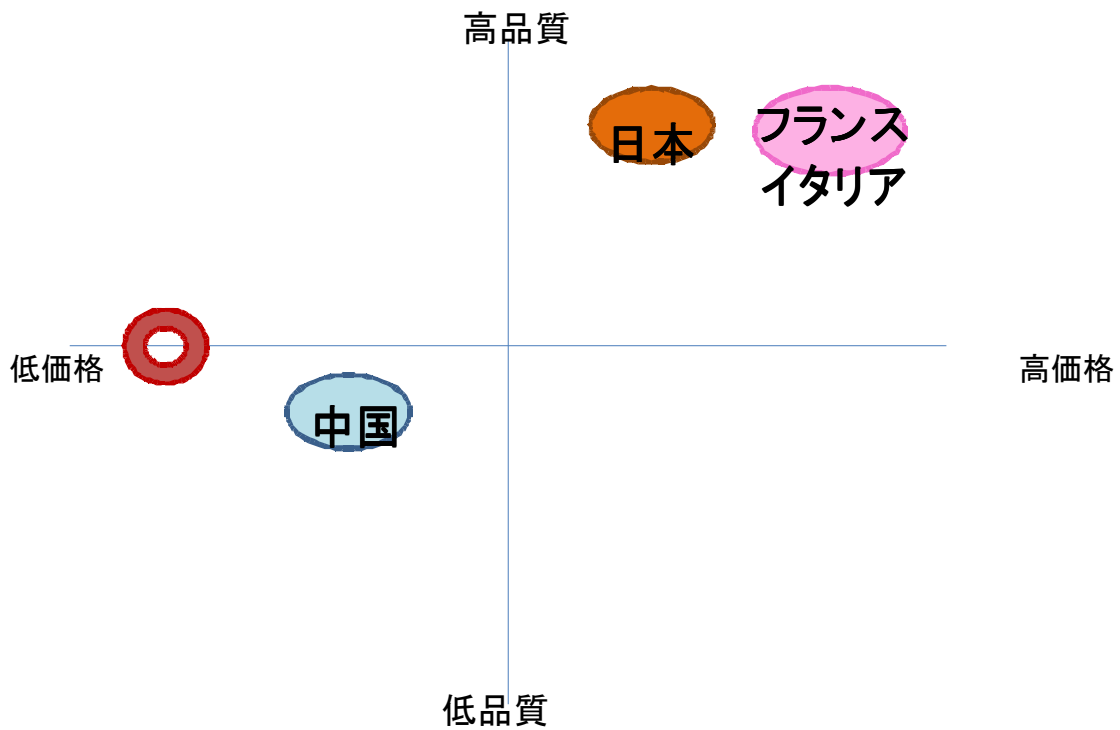


図2：理想とすべき位置

そこで、提案は、現在の市場の中に、MADE in JAPAN の製品を図 2 に示すような位置付けで勝負すべきだと考える。

イタリア、フランスの製品に負けず劣らずの製品として、この位置付けが国内、海外において浸透した時、まだまだチャンスはある。高品質でありながら、イタリア製品、フランス製品ほど高くはない、なおかつ安すぎもしない中級品以上の商品として勝負することができれば、日本の製品はまだまだ伸び代がある。

また、前述した、飛行機や防弾チョッキなどの衣料品以外への用途など、潜在的な可能性を含めるとまだまだ繊維産業には伸び代があると思われる。

日本の繊維産業の有する技術力、デザイン力等は世界有数であり、生産や流通のロスを大幅に削減しつつ、技術、デザイン等を活用したコストパフォーマンスのいい商品を開発・生産・販売する構造となれば、日本の繊維産業は国内外で十分な国際競争力を発揮し得る。先進国の中で日本ほど衣類の輸出の少ない国はなく、これは裏を返せば国際競争力さえ有すれば、大いなる可能性があることを意味している。

光武グループ(8名)

時田 純平

佐々木 龍之介

鈴木 達也

田中 瑞希

永坂 健

藤林 諒

山田 安彦

吉田 拓朗

付記：繊維産業に関するデータはパワーポイント編を参照してください。